American Rock Lyric Landscape

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケイプ—

ロックの歌詞から見えてくるアメリカの風景

文=ジョージ・カックル
イラストレイション=花井祐介

第11回
イーグルス「テキーラ・サンライズ」
〝ハイヤード・ハンド〟の悲しみ

Eagles "Desperado"
イーグルス『ならず者』
Asylum●SD5068［1973］アサイラム（ワーナー）◎WPCR11562

今月の曲は1973年にリリースされたイーグルスの2枚目のアルバム『ならず者（Desperado）』からシングル・カットされた「テキーラ・サンライズ」だ。『ならず者』は西部を想わせる曲を集めた、一種のコンセプト・アルバムで、当初はあまり売れなかったが、現在はクラシック・ロックの名盤のひとつとして愛されている。18世紀後半のアメリカの無法者集団ドゥーリン＝ドルトンがテーマ、と語られることが多いが、すべての曲がアウトローを題材としているわけではない。この曲も、ドゥーリン＝ドルトンとの共通点は、西部のイメージだけだ。実はこの曲をじっくりと聴いたのは初めてで、グレン・フライとドン・ヘンリーのソングライターとしての偉大さに感動し、目からウロコだった。

ところで、タイトルにあるテキーラはメキシコのブルーアガヴェというサボテンから作る蒸留酒だ。フランスのシャンパンがシャンパーニュ地方で作られるものを指すように、テキーラもハリスコ州とその周辺の一部のエリアで作ったものしかその名で呼ばない。テキーラ・サンライズは、そのテキーラをベースに、ザクロから作るグレナデンという赤いシロップとオレンジ・ジュースで作るカクテルだ。オレンジ・ジュースはグラスの上部分にとどまり、赤いグレナデン・シロップは底に沈み、鮮やかな色合いはまるで砂漠の朝日のようなイメージだ。現在ではこの材料がポピュラーだが、オリジナルはちょっと違う。もともとは30年代か40年代にアリゾナ州のビルトモア・ホテルで作られた。そのときはテキーラとクレーム・ド・カシスとライム・ジュース、炭酸だったそうで、見た目はそれほど赤くはない。きっとそれがアリゾナで見る日の出なのだろう。では、詩の説明に入ろう。

It's another tequila sunrise
Staring slowly across the sky
Said goodbye
He was just a hired hand

Working on the dreams
He planned to try
The days go by

またテキーラ・サンライズのような朝が巡ってきた。朝日が空を渡っていく。これは英語ならではの言い回しだろう。さよならを言ったとあるが、ここではまだ誰が誰に言っているのかわからない。次では違う人の話になる。〝彼〟はただの雇われた人間だ。'hired hand'とは、雇われ人を指す。夢のために努力して、がんばっている〝彼〟だが、毎日が流れ去ってしまうだけだ。

「テキーラ・サンライズ」は、米国南西部の砂漠の社会をイメージさせる。そして'hired hand'は、牧場で働く人を思わせる言葉だ。俺は初めてこの曲を聞いたとき、65年のジェームス・ディーン最後の映画『ジャイアント』を思い出した。彼が演じた若者ジェットは牧場のハイヤード・ハンド、つまり単なるカウボーイだった。ロック・ハドソンとエリザベス・テイラーが演じるのは牧場主とその奥さんで、彼らとは住む世界が違う。たとえジェットが金持ちになっても、何も変わらない。金を持っていてもクラスはない、ただのハイヤード・ハンドなんだ。ちなみにグレン・フライは、『ならず者』用の曲を書き始めた晩にジェームス・ディーンについての曲も書き始めた、と語っている。その曲は、彼らの3作目『オン・ザ・ボーダー』に収められている。

自分の話になるが、初めてカリフォルニアに住んだ76年の頃、当時20歳だった俺は牧場で働いたことがあった。当時は長い髪の毛のせいで雇ってくれるところが見つからず、日本で言えばハローワークのような職業斡旋所へ行き、仕事を探した。でもなかなか見つからず、あきらめようと思っていた矢先、壁に貼ってあった〝ランチ・ハンド募集〟という紙切れが目に入った。給料は安かったが、子供の頃からカウボーイに憧れていた俺には最高の仕事だ。馬に乗って銃を持ち、牛を追っかける。想像しただけでもワクワクした。俺は早速電話をし、次の朝に出向く約束を取りつけた。

翌日は日の出さえ待ちきれずに朝早く目が覚め、カウボーイ・ハットとカウボーイ・ブーツに身を包んだ。そして父に送ってもらうと、そこには予想外の景色が広がっていた。俺が想像していた西部劇に出てきそうな牛の牧場ではなく、馬の牧場だった。金持ちのお嬢さんたちが馬を乗りにくる乗馬クラブだったんだ。その馬のケアをするのが俺の仕事だ。もうがっかりだった。俺はテレビで人気のあった西部劇番組「ボナンザ」に出てくるような牧場で働くはずだったのにってね。しかし馬の牧場でも、みんなカウボーイの格好をしていた。全員、カウボーイ・ハットとカウボーイ・ブーツ。もちろんジーパンはラングラー。まあいい、格好だけでもと、俺は自分を説き伏せた。しかし仕事は日の出前から、日が暮れるまで。一日は俺にとって相当長かった。

Every night when the sun goes down
Just another lonely boy in town
And she's out running round

詩に戻ろう。日が暮れると、雇われ人の〝彼〟は毎晩、ひとりぼっちの寂しい男になる。彼女はほかの男と遊んでいる。'running round'には、夜遊んだり、ほかの男と寝ているというニュアンスがある。

She wasn't just another woman

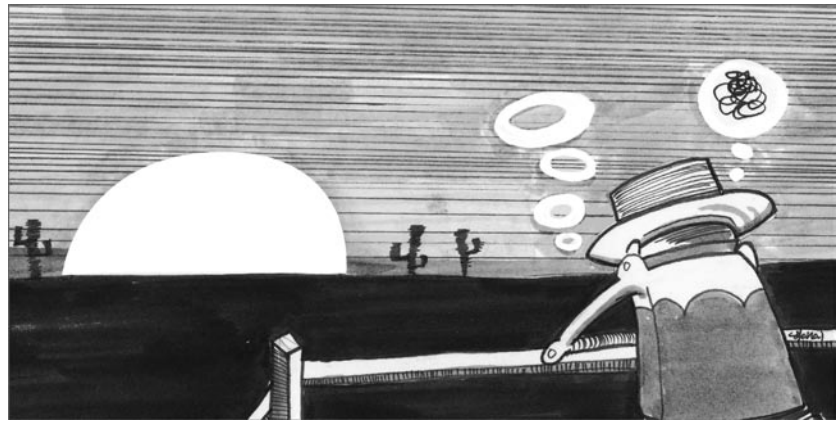
●ジョージ・カックル／GEORGE COCKLE　ラジオ・パーソナリティ。1956年、鎌倉生まれ。

And I couldn't keep from coming on
It's been so long

ここから内容が変わる。最初の1行で、彼女は特別な女だったと言っている。この歌の主人公の〝俺〟は、彼女を誘うしかなかった。〝俺〟も長い間、ガールフレンドがいなかったからと言い訳がましい。'coming on'は、ナンパするとか誘うという意味だ。

Oh, and it's a hollow feeling
When it comes down to dealing friends
It never ends

主人公の〝俺〟は、心が空っぽになっているような寂しさを感じている。詩のなかにある'dealing friends'という言葉から、主人公は友達である〝彼〟を裏切ったとわかる。'dealing'は裏切るという意味だ。トランプを配ることをディール、配る人をディーラーと呼ぶが、単語のあとにフレンドをつけると、友達を裏切るという意味になる。主人公は、実は雇っている〝彼〟と友達でもあるんだ。最後の行の'It never ends'で、人生にはよくあることと言っている。



最初の歌い出しではわからなかったことが、このあたりから見えてくる。もう一度、最初のヴァースを見てみよう。つまり主人公の〝俺〟は夢を追いかけて働く友達を裏切り、友達のガールフレンドと寝てしまった。一夜を明かしたあと、彼女にさよならを言って部屋を出る。そしてテキーラ・サンライズみたいな日の出を見て、裏切った〝彼〟のことを考え始める。このヴァースになって初めて、主人公の心に日の出が痛みを与えていると気づく。この曲全体がなんとなく物悲しく聞こえるのは、そんな男の心の痛みを表わしているからなのだろう。

Take another shot of courage
Wonder why the right words never come
You just get numb
It's another tequila sunrise
This old world
Still looks the same Another frame, mm

友達を裏切った〝俺〟は自分に言っている。もう一杯テキーラ・ショットを飲んで、勇気を出しなよと。友達に白状したいが、言わなければならない言葉が出てこない。頭が真っ白になる。そして、また朝を迎えたとある。つまり、男は友達の彼女とまた寝てしまったのだろう。この世界は全く変わらない。映画を見ているみたいに、人生はフレームを替えながら延々と続く。人を裏切っても、また明日が来てしまう。

この曲の詩の意味がわかると、曲がまた違ったものに聞こえてくるだろう。なんとなく雰囲気だけで耳にしていたマイナー・キーの曲が、意味のあるものに聞こえてくるはずだ。男の寂しさが伝わってくる。

ところで、またもや若い頃のカウボーイの仕事の話をさせてもらおう。その牧場の仕事は面白いうえに、おおいに勉強になった。朝イチには馬小屋を掃除するが、ここで初めて馬は種類によって、性格が違うとわかった。大きな馬小屋にはたくさんの仕切りがあり、馬が一頭ずつ並んでいる。仕事はその仕切りのなかに入り、糞などで汚れたワラを、新しくきれいなワラに取り替えること。その後はエサをやる。掃除をしている間、性格が悪い馬は俺を壁に押し付け、足を踏もうとする。映画で見るようなバッキングはしなかったが、初めての時はすごく怖かった。なかでもベージュの身体で金髪のパロミーノという一番きれいな種類が一番性格が悪かった。

集めた馬糞と汚れたワラはトラックの上にのせ、山の裏で降ろす。当然、そこは馬糞とワラの山。1年中蒸気が出ている。発酵しているんだろう。手を入れたら火傷するほど熱いんだ。もちろん虫なんかいない。匂いは馬のそれそのものだ。ランチの時間は、そこで仲良くなったカウボーイたちと食事をする。何人かは住み込みで、牧場の奥にあるトレーラーで暮らしている。最初はみんな仲が良くて仕事の後も一緒に飲みに行くから友達だと思っていたが、ちょっと違った。そこのカウボーイは、ほとんどが雇われているハイヤード・ハンドだったが、何人かはその牧場のオーナーの息子だった。友達だが社会は違う。一緒にランチに行かないのが、何よりの証拠だった。

雇われカウボーイたちのランチ時の話はいつも同じだ。馬に乗りにくる女の子の話ばかり。どの娘が俺に気があるか、あの娘が俺のことを見ていたとか。でもそれは夢の世界だ。そんなことがあるわけがない。映画『ジャイアント』と同じだ。客として来ているお嬢さんたちと付き合あえる立場じゃない。昼休みの後の仕事は、違った意味で面白い。俺たちカウボーイは木を白く塗ったフェンスの上に座り、ワラを口に入れたり、噛みタバコをかんだり、タバコを吸ったりして暇をつぶす。馬を乗りにきているお嬢さんたちのための演出だ。俺たちに何かを頼んでくるまで、ただ座っている。頼まれたら、馬をしまったり、蔵を付けたりして、カウボーイの仕事をするんだ。

俺はこの仕事をほんの1か月ぐらいでやめた。というより、首になった。オーナーがもうひとりの息子に仕事をさせるために、俺をやめさせたんだ。でも俺はもちろん、一生の仕事とは思っていなかったから、構わなかった。当時のアメリカは建国２００周年。その記念の年にアメリカにいたかっただけだ。それもカウボーイなんていう憧れの仕事に就けたんだから、本望だ。本当にいい経験だった。アメリカにクラスを感じたカウボーイという仕事。みんな友達だけど、友達ではない。ハイヤー・ハンドという言葉を聞くと思い出す、楽しく哀しい思い出だ。「テキーラ・サンライズ」のなかにも聞こえてくる哀しい単語だ。

TEQUILA SUNRISE ©1983 by RED CLOUD MUSIC/CASS COUNTY MUSIC
All rights reserved. Used by permission. Print rights for Japan administered by YAMAHA MUSIC PUBLISHING,INC.
日本音楽著作権協会（出）許諾第1100454-101号